高年级

日语精读

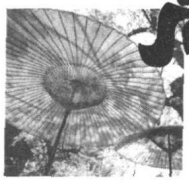
（第二册）

● 赵华敏　彭广陆　李奇楠 编著　● 顾海根　中原尚道 审校

上海译文出版社

北京大学外国语学院日语系

H369.4
54



高年级

日语精读

（第二册）

编著 赵华敏 彭广陆 李奇楠
审校 顾海根 中原尚道

北方工业大学图书馆
00546809

上海译文出版社

图书在版编目(CIP)数据

高年级日语精读. 第二册 / 赵华敏,彭广陆,李奇楠编著. —上海:上海译文出版社,2004. 3

ISBN 7-5327-3291-6

I. 高... II. ①赵... ②彭... ③李... III. 日语—高等学校—教材 IV. H36

中国版本图书馆 CIP 数据核字(2004)第 002191 号

版权所有 违者必究

高 年 级

日 语 精 读

第 二 册

编著 赵华敏 彭广陆 李奇楠

审校 顾海根 中原尚道

上 海 世 纪 出 版 集 团

译 文 出 版 社 出 版、发 行

上海福建中路 193 号

易文网: www. ewen. cc

全 国 新 华 书 店 经 销

上海商务联西印刷厂印刷

开本 787×1092 1/16 印张 17.5 字数 280,000

2004 年 3 月第 1 版 2004 年 3 月第 1 次印刷

印数: 0,001—5,100 册

ISBN 7-5327-3291-6/H · 592

定价: 23.00 元

本书如有缺页、错装或坏损等严重质量问题,请向承印厂联系调换

前　言

《高年级日语精读》是国家教育部外语教学指导委员会主持的“21世纪主干基础课教材”之一，供日语专业三、四年级学生使用。各册教材由课文、注释、词汇、语法、惯用语的用法、练习、阅读课文、附录等内容组成。

本教材的编写以《高等院校日语专业高年级阶段教学大纲》中对“日语综合技能课”的要求为依据，在选材上尽可能涵盖了文化、社会、科学、语言、文学等多方面的内容，力求使学生在巩固基础阶段所学的语言知识的同时，进一步提高驾驭日语的综合能力。

本教材在编写过程中，得到先后在北京大学任教的日本文教专家渡边爱二、中田敏夫、中原尚道、酒井惠美子等先生的大力支持，他们参加每周一次的编委会，审订教材内容，对编写工作提出了许多合理的建议。另外，本教材所采用的课文都选自日本的出版物，原文作者和有关出版社都给予了积极的支持，上海译文出版社也为此教材的出版做了大量的工作。谨此一并表示谢忱。

由于编者水平有限，缺乏经验，加之时间仓促，因此书中难免有这样或那样的谬误之处或缺憾，敬请读者批评指正。

编者

2003年11月

第二册说明

一、正文

本册共分 12 课。由以下内容构成：

课文（本文） 本册课文选用了随笔、演讲、小说、评论等不同体裁的文章，内容清新，饶有趣味。难度上照顾到由基础阶段向高年级阶段的过渡。

注释(注釈) 诠释课文中出现的专业术语及专有名词，以帮助使用者更好地理解课文内容。

词汇(新しい言葉) 以《高等院校日语专业基础阶段教学大纲》以外的词汇为主进行注释，并标出声调。

语法(文法) 对基础阶段未曾出现的语法项目进行了讲解、说明；对已出现过、但有一定难度、基础阶段不宜过多涉及的语法现象做了进一步的归纳、整理。为增强学生阅读、理解的能力，所使用的例句除个别经过加工之外，绝大部分均为实例。

惯用语用法(言葉の使い方) 利用大量实例，对常用的惯用语做了详尽的解释，弥补了以往教材的只作释义或只举少量例句的缺陷。有助于使用者加深对惯用语意义和用法的理解。

练习(練習) 分别设立了“言葉の学習”、“文法の練習”、“表現の工夫”、“内容の理解”4 个项目，通过大量的专项和综合练习，以达到巩固所学知识的目的，从而在加深对日本人的语言心理和语言文化背景理解的基础上，进一步提高日语的综合运用能力。

二、阅读课文

共 6 篇。在选材上力求接近正课文的题材，以便教员作为补充教材加以利用，同时也为学生自学提供一些素材，以达到扩大词汇量之目的。

三、附录

由“文法項目索引”、“言葉の使い方の索引”、“新しい言葉の索引”三部分组成，以便于使用者复习、检索。

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com

四、本书的编写、分工

课文、阅读课文由编写人员共同对所选素材加以筛选、讨论决定。具体分工和执笔者如下：

赵华敏：选材、整体设计、练习、全书统稿。

彭广陆：语法、惯用语用法、语法项目和惯用语用法的索引。

李奇楠：注释、词汇、词汇索引。

顾海根教授协助了本教材的立项工作，参与了选材、编委会的组织工作及全书的审订工作。原北大文教专家渡边爱二先生为本书的编写提供了大量的素材和宝贵的建议；原北大文教专家中原尚道先生对全书进行了审订。原北大硕士生，现林业大学教师魏萍协助了部分词汇的注释。原北大本科学生蔡雷雷协助了课文和阅读课文的录入。

本书曾作为北京大学内部教材出版，在本校日本语言文化系试用两年和清华大学日语专业试用一年的基础上，经过修订，此次正式出版。尽管如此，仍有诸多不尽如人意之处，欢迎使用者提出宝贵意见，以便将来进一步完善。

本教材每课的词汇（新しい言葉）中所使用的符号和词汇属类简称如下：

一、符号

▼　非常用汉字

▽　非常用汉字音训

〈 〉熟字训

二、音调

主要以《NHK　日本語発音アクセント辞典　新版》为准，采用①②③……的形式标出。

三、词汇属类简称

〈名〉——名詞

〈副〉——副詞

〈接〉——接続詞

〈感〉——感嘆詞

〈形〉——形容詞

〈形動〉——形容動詞

〈助数〉——助数詞

〈連体〉——連体詞

〈助動〉——助動詞

〈副助〉——副助詞

〈格助〉——格助詞

〈接助〉——接続助詞

〈連語〉——連語（词组）

〈自五〉——自動詞・五段活用

〈自サ〉——自動詞・サ行変格活用

〈自上一〉——自動詞・上一段活用

〈自下一〉——自動詞・下一段活用

〈他五〉——他動詞・五段活用

〈他サ〉——他動詞・サ行変格活用

〈他上一〉——他動詞・上一段活用

〈他下一〉——他動詞・下一段活用

目　次

第一課　一枚の葉……東山魁夷　(1)
第二課　娘たちへの手紙……壇一雄　(22)
第三課　北京の子……加藤幸子　(42)
第四課　人類よ　宇宙人になれ……立花隆　(61)
第五課　日本人と日本語……小山修三　(84)
第六課　言葉と自己規定……鈴木孝夫　(101)
第七課　比喩の世界……森山卓郎　(124)
第八課　言葉についての新しい認識……池上嘉彦　(137)
第九課　『オンリー・ミー』より（正義・逆鱗）
……三谷幸喜　(156)
第十課　友情の杯……星新一　(174)
第十一課　屋根の上のサワン……井伏鱒二　(191)
第十二課　砂漠への旅……森本哲郎　(219)

〔補助教材〕

一　お辞儀……向田邦子　(234)
二　畳と床……木村尚三郎　(242)
三　日本のふるさと……平岩弓枝　(245)
四　気象と人間……倉嶋厚　(247)
五　絶対値……内館牧子　(251)
六　女ことば　男ことば……上野千鶴子　(254)

【付録】

文法項目索引……(256)
言葉の使い方の索引……(260)
新しい言葉の索引……(263)

第一課　一枚の葉

東山魁夷

本 文

京都を主にした連作を描いたころのことである。円山の夜桜として知られている、あの、しだれ桜の満開の姿と、春の宵の満月が呼応する情景を見たいと思った。

四月十日ごろだったか、その夜が十五夜であることを確かめて京都へ向かった。昼間、円山公園へ行ってみると、幸いに桜は満開であった。春の陽ざしが今宵（こよい）の月夜を約束するかのように明るかった。夕方までの時間を寂光院や三千院を訪ねて過ごし、ころ合いを見て京都の町へ帰って来た。

下鴨辺りだったか、ふと車の窓からのぞくと、東の空にぽっかりと円い大きな月が浮かんでいるではないか。私は驚いた。円山の桜を前にして東山から顔を出したばかりの月が見たかったのであって、空高く月が昇ったのでは意味がなくなってしまう。大原で時間を取りすぎたことが悔やまれた。

円山公園へ急いでたどり着くと、私はほっと一息ついた。ここでは山が間近であるため、幸いに月はまだ姿を見せていなかった。紺青に暮れた東山を背景に、この一株のしだれ桜は、淡紅色の華麗な粧いを枝いっぱいに付けて、京の春を一身に集め尽くしたかに見える。しかも、地上には一片の落花もなかった。

山の頂が明るみ、月がわずかにのぞき出て、紫がかった宵空を静かに昇り始めた。花は今、月を見上げる。月も花を見る。この瞬間、ぼんぼりの灯も人々の雑踏も跡形もなく消え去って、ただ、月と花だけの清麗な天地となった。

これが巡り合わせというものであろうか。花の盛りは短く、月の盛りと出会うのは、なかなか難しいことである。また、月の盛りは、この場合ただ一

夜である。もし曇りか雨になれば、見ることができない。その上、私がその場に居合わせなければならない。

花が永遠に咲き、私たちも永遠に地上に存在しているなら、両者の巡り合いに何の感動も起こらないであろう。花は散ることによって生命の輝きを示すものである。花を美しいと思う心の底には、お互いの生命を慈しみ、地上での短い存在の間に巡り合った喜びが、無意識のうちにも感じられているに違いない。それならば、花に限らず名も知らぬ路傍の一本の草でも同じことではないだろうか。

風景によって心の目が開けた体験を、私は戦争の最中に得た。自己の生命の火が間もなく確実に消えるであろうと自覚せざるをえない状況の中で、初めて自然の風景が、充実した命あるものとして目に映った。強い感動を受けた。それまでの私だったら、見向きもしない平凡な風景ではあったが——。

また、戦争直後、すべてが貧しい時代に、私自身もどん底に居たのだが、冬枯れの寂寞（せきばく）とした山の上で、自然と自己とのつながり、緊密な充足感に目覚めた。切実で純粋な祈りが心に在った。風景画家として私が出発したのは、このような地点からであった。

私が好んで描くのは、人跡未踏といった景観ではなく、人間の息吹がどこかに感じられる風景が多い。しかし、私の風景の中に人物が出て来ることは、まずないと言ってよい。その理由の一つは、私の描くのは人間の心の象徴としての風景であり、風景自体が人間の心を語っているからである。

私が常に作品のモティーフにしたり、随筆に書いているのは、清澄な自然と素朴な人間性に触れての感動が主である。戦後の時代の激しく急な進みの中で、私自身、時代離れのした道を歩んでいると思う時が多かった。しかし、今では、それで良かったと思っているし、また、それをこれからも貫き通したいと念じている。

人はもっと謙虚に自然を、風景を見つめるべきである。それには、旅に出て大自然に接することも必要であり、異なった風土での人々の生活を興味深くながめるのもよいが、私たちの住んでいる近くに、例えば、庭の一本の木、一枚の葉でも心をこめてながめれば、根源的な生の意義を感じ取る場合があ

ると思われる。

私は庭の木をながめている。いや、枝に付いた一枚の葉を見ている。今は、その葉は美しい緑に、夏の陽を受けて輝いている。私は、その葉が、まだ小さな芽として初めて私の目に触れたころを思い出す。それは、昨年の冬の初めであった。今の葉のある場所に乾いた茶色の葉が付いていたのが、枝を離れて散り落ちていった時である。そこに、まだ小さな固い芽であったおまえが、みずみずしい生命を宿して誕生していた。

寒い風が吹き、雪の降る日があったが、おまえは黙々として春を待ち、徐々に充実した力を内に蓄えていく。ある朝、小雨がやむと、点々と真珠の玉が枝に並んで光っているのが見える。それは芽生えの一つ一つに雨水がたまっていたのである。芽の膨らみが進んできたのを感じた。春はもう間近である。

ようやく春が来る。芽の開く時の喜び。しかし、あの、地上に散っていった葉は、今は朽ち果てて土に還(かえ)っていく。

おまえは、すくすくと伸びて初夏の陽を明るく透かす若葉となる。生命の充実を感じるとともに、その柔らかい葉が虫におかされやすいのも、この季節である。幸いにおまえは無事に夏を迎え、今、仲間とともに青々と繁(しげ)り合っている。

私はおまえの未来をも知っている。夏の盛りになると、葉陰ではアブラゼミが騒がしく鳴き立てるだろう。しかし、台風が過ぎるころになると、ヒグラシや、ツクツクボウシの、どこか寂しげな歌声に変わる。涼しくなる。蝉(せみ)の声が聞こえなくなって、今度は根本の方から虫の合唱が、しめやかに秋の夜の興を添える。

おまえの緑は、なんとなく疲れた色合いになってくる。やがて黄ばみ茶色になって、寒い雨の中にうなだれている。一夜、風が雨戸を鳴らすと、翌朝、おまえの姿は、もう、枝には見られない。ただ、その跡に小さな芽が付いているのを私は見いだすだろう。その芽が開くころ、地上に横たわっているおまえは土に還っていくのである。

これが自然であり、おまえだけではなく、地上に存在するすべての生あるものの宿命である。一枚の葉が落ちることはけっして無意味ではなく、その

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com

木全体の生に深くかかわっていることが分かる。一枚の葉に誕生と衰滅があってこそ、四季を通じての生々流転が行われる。

一人の人間の死も、人類全体の生にかかわっている。死はだれしも好ましくないに違いないが、自分に与えられた生を大切にして、同時にひとの生をも大切にして、その生の終わりの時、大地へ還っていくことは幸いと思わねばならぬ。それは、私が庭の木の一枚の葉を観察して得た諦観と言うよりは、一枚の葉が生と死の輪廻(りんね)の要諦を私に向かって静かに語ってくれた言葉なのである。

[東京書籍『新訂現代国語三』による]

東山魁夷（ひがしやま　かいい）

1908—1999。神奈川県の生まれ。本名、新吉。日本画家。主な著書に『風景との対話』『泉に聴く』などがある。

「一枚の葉」　出典は、『私たちの風景』(1975年刊)。

注 釈

円山（まるやま）　京都市東山区の地名。ここでは、そこにある円山公園のこと。東山の山麓に当たる。／園山（公園）。

四月十日　ここでは、1966年の4月10日を指す。／4月10日。

寂光院・三千院（じゃっこういん・さんぜんいん）　ともに京都市左京区大原にある天台宗の寺。／寂光院、三千院。

下鴨（しもがも）　京都市左京区の地名。市の北東部にある。／下鴨（地名）。

東山（ひがしやま）　京都市、鴨川の東に連なる丘陵。京都の東方に当たる山の意。ふつう北は比叡山(ひえいざん)から南は稲荷山（いなりやま）までを指し、古来、東山三十六峰の称がある。風光にすぐれ、名所旧跡が多い。西山、北山に対して言う。

大原（おおはら）　京都市左京区の一地区。市の最北部にあり、高野川に沿う小さな盆地をなす。後鳥羽天皇（ごとばてんのう）陵、寂光院・来迎院（らいごういん）・三千院の古刹がある。「おはら」とも言う。／大原。

京（きょう）　みやこ。ここでは、京都のこと。／京都。

新しい言葉

れんさく⓪【連作】〈名・他サ〉 **1.** 同じ土地に同じ種類の作物を毎年続けて栽培すること ／連続栽培。 **2.** 文芸・美術などで、一人の作者が一連のテーマに基づいていく

つかの作品を作ること。また、その作品。／系列创作；系列作品。

よざくら②【夜桜】〈名〉夜、眺める桜の花。夜、照明をつけて桜を見物する風習がある。／夜晚的樱花。

しだれざくら④【枝垂れ桜】〈名〉桜の一種。枝は細くて垂直に垂れ下がる。／垂枝樱。

まんかい⓪【満開】〈名〉花がすっかり開くこと。また、すべての花が開くこと。／盛开。

じゅうごや⓪【十五夜】〈名〉**1.** 陰暦十五日の夜。満月の夜。／阴历十五的晚上；月圆之夜。 **2.** 特に、陰暦八月十五日の夜を指す。この夜、月見をする風習がある。／特指阴历八月十五赏月之夜。

ひざし⓪【日差し・日▽射し・▽陽▽射し】〈名〉日の光がさすこと。また、その光。／日照；阳光。

ころあい⓪【▼頃合い】〈名〉**1.** ちょうどよい時機。／适当的时机；良机。**2.** ちょうどよい程度。／适当的程度；程度恰好。

ぽっかり（と）③〈副〉**1.** 水面・心などに急に現れたり、空中に軽やかに存在したりするさま。／浮现；漂浮状。 **2.** 口を大きく開けるさま。また、大きな穴などが開くさま。／大张着嘴；裂开大缝状；开口状。

くやむ②【悔やむ】〈他五〉失敗したことや十分にできなかったことなどを後から残念に思う。後悔する。／懊悔；后悔；遗憾。

ひといき②【一息】〈名〉**1.** 一回の呼吸。ひと呼吸。／一口气；一次呼吸。 **2.** ちょっと休むこと。ひと休み。／稍事休息。

つく①②【▽吐く】〈他五〉**1.** 口から息を強く出す。／呼吸；呼出。 **2.**（うそなどを）言う。／说（谎）。

まぢか①⓪【間近】〈名・形動〉時間や距離がすぐのところに近づいていること。／接近；临近；靠近。

こんじょう⓪【紺青】〈名〉明るく、鮮やかな藍色。また、その色の顔料。／绀青；天蓝；蔚蓝。

くれる⓪【暮れる】〈自下一〉太陽が沈んで、あたりが暗くなる。／日暮；天黑下来。

かぶ【株】〈名〉根のついた草木全体。特にその根元の部分。また、それを数える語。／树木；棵（量词）。

よそおい⓪③【装い・▽粧い】〈名〉外観を整えること。また、身なりを美しく飾ること。また、その外観・姿。／打扮；化妆；外观；装束。

つくす②【尽くす】〈他五〉**1.** ありったけのものを出し切ってしまう。／尽；竭。 **2.**（自動詞的に）自らをなげうってそのもののために精一杯の働きをする。尽力する。／（为……）效力；（为……）尽力。**3.**（動詞の連用形に付いて複合動詞を作る）すっかり…する。／……尽；……光；完全……。

しかも②【▽然も・▼而も】〈接〉**1.** 前に述べたことにさらに他のことが加わる意を表す。その上。／而且。 **2.** 前に述べたことと対比的なことが次に続く意を表す。それでもなお。／尽管如此；却。

いっぺん③⓪【一片】〈名〉　ひとひら。ひときれ。／一片；一瓣。

あかるむ③【明るむ】〈自五〉　(日や月の光で)明るくなる。／亮；转晴。

-がかる〈接尾〉　(色彩を表す名詞に付いて)……の色を帯びる意を表す。／发（紫 etc.)、带有……颜色。

ぼんぼり⓪【<雪洞>】〈名〉絹または紙張りの覆いをつけた手燭（てしょく）・燭台。また、柄と台座をつけた行灯（あんどん)。／带绢或纸糊灯罩的蜡灯；烛台；小型座灯。

ざっとう⓪【雑踏・雑▼沓】〈名・自サ〉　たくさんの人が出て込み合うこと。／人多；拥挤。

きえさる③【消え去る】〈自五〉　(姿・形、また、ある気持ちなどが）消えてなくなる。／消失。

せいれい⓪【清麗】〈形動〉　清らかでうるわしいこと。／清纯；秀丽。

めぐりあわせ⓪【巡り合わせ】〈名〉　人の意志とはかかわりなくめぐってくる運命。／命运；机缘。

いあわせる④【居合わせる】〈自下一〉　ちょうどその場にいる。／恰好在场。

いつくしむ④【慈しむ・▽愛しむ】〈他五〉　愛情を持って、かわいがる。大切にする。／疼爱；怜爱。

さいちゅう①【最中】〈名〉　動作や状態が最も盛んな時。ある行為・動作が行われている、ちょうどその時。「さなか」とも言う。／最……的时候；正在……的时候。

みむき①②【見向き】〈名〉　振り返ってその方を見ること。またそちらに関心を示すこと。多く下に打ち消しを伴って使う。／回头看；回顾；关心。

どんぞこ⓪【どん底】〈名〉　**1.** 物のいちばん底。／最底下；底层。　**2.** 最悪・最低の状態。／最恶劣的状况；最底层。

ふゆがれ⓪【冬枯れ】〈名〉　冬に草木の葉が枯れること。また、そのさびしい眺め。／冬季草木枯萎（的凄凉景象）。

じんせきみとう【人跡未踏】〈名〉　人が一度も足を踏み入れたことがないこと。／人迹罕至。

いぶき①【息吹】〈名〉　息づかい。呼吸。また、いきいきと活動するけはい。／气息；生机；活力。

モティーフ②【法 motif】〈名〉　動機。主旨。芸術・文学などの創作の動機となる主要な題材・思想。「モチーフ」とも言う。／主旨；主题；中心思想。

せいちょう⓪【清澄】〈名・形動〉　清らかに澄みきっていること。／清澈；清湛。

-ばなれ【-離れ】〈接尾〉　(名詞に付いて）離れていくこと。また、大層かけ離れていること。／离；远离；脱离。

つらぬきとおす⑤【貫き通す】〈他五〉　**1.** (物を反対側まで）突き抜けて通す。／穿；贯穿；贯通。**2.** (目的・願望などを）終わりまで変えずに続ける。／贯彻；坚持。

ねんじる⓪③【念じる】〈他上一〉　ある事柄の成就や実現を強く願う。／希望；祈求。

みつめる⓪③【見詰める】〈他下一〉　**1.** 対象から視線を離さないでじっと見続ける。凝視（ぎょうし）する。／盯着看；凝视；注视。　**2.** 目をそらさないで物事をはっ

きりと見る。直視する。／正视；审视。

ことなる③【異なる】〈自五〉　ある事柄が基準となる事柄や他の同様の事柄と同一でない。違う。／不同；不一样。

こめる②【込める】〈他下一〉　**1.** 銃器に弾丸をしっかりと収め入れる。装填（そうてん）する／装（子弹）。　**2.** その中に十分に注ぎ入れる。注入する。また、ある事柄に感情や情熱を注ぎ入れる。／注入；贯注；倾注；投入。

かわく②【乾く】〈自五〉　物に付いたり含まれたりしていた水分がなくなる。乾燥する。／干；干燥；干枯。

みずみずしい⑤【▼瑞▼々しい】〈形〉　新鮮で生き生きしているさま。つやがあって、若々しい。／新鲜；水灵。

やどす②【宿す】〈他五〉　**1.** 内部に含み持つ。／包含；蕴含。　**2.** 子をはらむ。身ごもる。／怀孕；孕育。

もくもくと⓪【黙々と】〈副〉　黙って何かをし続けるさま。／默默地。

じょじょに①【徐々に】〈副〉　ゆっくりと進行するさま。少しずつ変化するさま。だんだん。／渐渐；徐徐。

たくわえる④③【蓄える・▽貯える】〈他下一〉　**1.** 将来に備えて金銭や物品をためておく。／储蓄。　**2.** 知識や力などをいつでも発揮できるようにためておく。また、考えなどを(いつでも取り出せるような状態で)心に隠し持つ。／积蓄；储备。

てんてんと⓪③【点々と】〈副〉　**1.** 点を打ったようにあちこちに散らばっているさま。／星星点点状。**2.** 雫（しずく）がしたたり落ちるさま。／滴落状。

めばえ③②⓪【芽生え】〈名〉　芽が出始めること。また、その芽。／发芽；出芽；芽。

ふくらみ⓪【膨らみ・▽脹らみ】〈名〉　膨らむこと。また、その部分や程度。／鼓起；膨胀。

ようやく⓪【▽漸く】〈副〉長い時を経たのちに、また、あれこれ手間をかけたのちに、望んでいたことが実現するさま。やっと。／终于；好不容易。

くちはてる④⓪【朽ち果てる】〈自下一〉　もとの形をとどめないまでに腐ってしまう。／腐烂；腐朽。

すくすく（と）②①〈副〉　樹木などが勢いよく伸びるさま。また子供が順調に元気よく成長するさま。／迅速成长貌；茁壮成长貌。

すかす⓪【透かす】〈他五〉　光を通す。また、そのようにして中が見えるようにする。／透过。

おかす②⓪【冒す・侵す】〈他五〉　あるものが人や植物などを害する。損なう。むしばむ。／侵袭；侵害。

あおあおと③【青々と】〈副〉　いかにも青いさま。また、一面に青いさま。／（一片）碧绿。

しげる②【茂る・▽繁る】〈自五〉　草木が伸びて枝・葉がたくさん出る。／草木枝叶茂盛；繁茂。

はかげ⓪【葉陰】〈名〉　木や草の葉のかげ。／草木叶子的阴影。

アブラゼミ③【油▼蝉】〈名〉　セミの一種。夏、日本各地で最も普通に見られる。暑さをかき立てるように樹上でジージーと鳴く。／秋蝉。

さわがしい④【騒がしい】〈形〉　人が落ち着いていられないほど、音や声が多かったり続いたりするさま。うるさい。やかましい。耳ざわりだ。／喧闹；吵闹；嘈杂。

なきたてる④【鳴き立てる】〈自下一〉虫・鳥獣などが、声高にしきりに鳴く。／鸣叫。

ヒグラシ⓪②【▼蜩】〈名〉　セミの一種。夏から秋、早朝や夕方にカナカナと高い声で鳴く。／茅蜩。

ツクツクボウシ⑤【つくつく法師】〈名〉　セミの一種。晩夏から秋にかけて多く現れ、オーシーツクツクと鳴く。／寒蝉。

しめやか②〈形動〉　**1.** しんみりと落ち着いているさま。／寂静；悄然。**2.** 悲しみに気分が沈んでいるさま。／肃穆。

いろあい⓪③【色合い】〈名〉　**1.** 色のぐあい。色調。／色调。**2.** 傾向や性質の様相。／性质、倾向。

きばむ②⓪【黄ばむ】〈自五〉　黄色みを帯びる。／带有黄色；变黄；发黄。

うなだれる⓪④【▽項垂れる】〈自下一〉　頭を前に低く傾ける。特に、心配・落胆・悲しみ・恥ずかしさなどのために、頭を前に低くたれる。／（因忧虑、悲观、羞耻等）垂首；低头。

あまど②【雨戸】〈名〉　風雨の防止や防犯・保温などのために、窓や縁側など家屋の外側に立てる戸。／防雨窗；防护门。

ならす⓪【鳴らす】〈他五〉　吹いたり叩いたりして音を出す。／使响；使发出声音。

みいだす③⓪【見▽出す】〈他五〉　隠されたものなどを新たに見つけ出す。発見する。／找到；发现。

よこたわる④【横たわる】〈自五〉　横になる。横に伏す。／躺；伏。

せいせいるてん【生々流転】〈名〉　万物は永遠に生死を繰り返し、絶えず移り変わってゆくこと。「しょうじょうるてん」とも言う。／生生不息。

しも〈副助〉　上に来る語を取り立てて強調する。／表示强调。

このましい④【好ましい】〈形〉　気に入っている。望ましい。／喜爱；希望。

ていかん⓪【▼諦観】〈名・他サ〉　物事の本質をはっきりと見きわめること。／谛视。

ようたい⓪【要▼諦】〈名〉物事の最も大切な所。「ようてい」とも言う。／真谛；要点。

文法

1．Nとして（の）

「資格、立場、性質、部類」などを表す。

（1）Nとして

1）24日から26日まで国賓として来日する韓国大統領の滞在日程が18日、固まった。

2）日本人としてあなたはこういう事実をどう思われますか。

3）僕は野島の妻になる人としてあなたを尊敬してきました。
4）隣人としてあの方に会ってあげて下さい。
5）彼は大学の教授としてより、むしろ作家としての方がよく知られている。
6）財源としてあてにすることはできません。
7）軽井沢（かるいざわ）は古くから避暑地として人気があるところだ。

（2）Nとしての
1）洪作はその夜、初めて思春期の少年としての、いろいろな感情を経験した。
2）それが教師としての、限界だった。
3）モーツァルトは、当時の風潮に従い、音楽家としての最大の成功を歌劇に賭けた。
4）報道機関としてのNHKが巨大な影響力をもっているのは、いうまでもないだろう。
5）国家としての「独立」も、かつてとは異なり、他国との円満な関係を築いてはじめて機能するのだ。
6）刑事事件としての、本格的な追及がこれから始まる。
7）首脳会議では、ほとんどすべての途上国が、環境破壊の根本原因としての「貧困」を取り上げ、その克服を口にした。

2．Nだったか

「Nだったか」は、話し手（書き手）の話した（書いた）ことが不確かであることを表す。時間を表す節が多い。

1）企業の歴史を見ると、シェアトップ企業はどんどん強くなる半面、二番手、三番手企業はいつしかおかしくなって、衰退するケースが多い。それで73年ごろだったか、社員を集めて「このままじゃダメだ。みんなで頑張ってシェアトップになろう」と言ったのです。
2）昨秋だったか、奈良時代の宰相、長屋王の屋敷跡から多くの木簡が出た。それによって、氷室の構造や、氷の運搬作業などについて詳しい事実がわかった。
3）5歳のときだったかしら、日本舞踊の発表会で初舞台を踏んだの。
4）私が小学校4年のころだったか、父は病院の経営を手がけることになった。
5）いつだったか、お母さんが私のところに二、三日泊まっていかれたことがありました。
6）耳鼻咽喉科だって何だって、お医者さま同士のつながりはあるわ。それに、たしか、週に一度だったか、K大病院に出ていらっしゃる、って伺ったわ。去年、御法事の時に。

3．Vかのように

「いかにもそのように感じる」という意を表す。

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com